「投薬」という言葉

JJ1SXA/池

医者による「投薬」を単純に読むと、医者が患者に薬を投げ与えるという意味に解釈でき、随分乱暴な話のようであるが、本当の意味は違うようです、単純に「患者さんに薬を投げ与える」という意味では無く、この「投薬」と言う字の語源には、仏教的意味が込められていて、その意味を表す物語は釈迦入滅を描いた涅槃図に示されているとの事です。

45年の長い伝道の旅を続けた釈迦は、80歳を過ぎたころから老齢に打ち勝つことができないことや、自らの生涯が終わりに近いことを知り、マガタ国の首都ラージャガハを出て自分の生まれ故郷へ向かって最後の旅を続けた、途中、釈迦は病のため、もはやこれまでと悟り、従者に「私を沙羅双樹の間に、頭を故郷（北）の方に向けて寝かせておくれ」と依頼し、その様子を描いた絵がある、その絵の右上から、飛雲に乗って天界から我が子の臨終に馳せ参じる仏母摩耶夫人の一行が描かれ、左側の沙羅双樹の枝には一つの袋が描かれている、この袋は釈迦の母である摩耶が、我が子を救おうと、不老の薬を袋に入れて下界に投げたのだが、沙羅の枝に引っかかって釈迦の手元には届かなかった、やがて薬の力を得た沙羅双樹は天にも届くほど小枝を伸ばし青々と茂ったという。

「投薬する」とか「投与する」という医学用語はこの絵に由来している、すなわち、我が子の病気をなんとしても治したい母親の深い慈愛や真心が投薬の語源となったのである。

入滅は、仏教用語で、滅度・寂滅ともいい、煩悩の炎が吹き消えた状態、宗教的解放を意味する解脱のことである、老荘思想の重要概念語「無為」と訳されることもある、よって、「入滅」とは、そのような境地に入ることをいう、ただし、完全な解脱は肉体の完全な消滅、つまり「死」によって完結することから、「入滅」とは、宗教的に目覚めた人が死ぬことをも意味し、一般に仏の死亡は入滅といい、高僧の死亡は遷化というが、特に宗祖の遷化を入滅と表現することもあるそうです。

釈迦入滅の図が「涅槃図」だ、今までに複数回この絵を見た記憶はありますが、単に仏教的な絵だという認識しかなかったが、先日親戚の法事に参列した時、法事を執り行った住職に、「涅槃図」を見て下さいと言われ、そこで解説も受けましたが、初めて投薬について知り、また、死者を北枕で寝かせるのも釈迦入滅に由来していることも知った、死者が釈尊にあやかって、霊界で少しでも厚遇を受けられるように、という遺族の願いがこのような形式に結びついたもののようである、釈尊が入滅した際、「頭北面西右脇臥」(頭を北に、顔を西に向け、体の右側を下に)の姿勢をとったと伝えられるところから由来しているという、現在、科学的には、地球の磁場の関係で北枕の方が健康には良いという説がある。

この寺の跡取り息子と聞いたので、当然のこととして、住職と書いたが、住職とは？で検索したら、住職とは、本来は「寺主」や「維那」などと呼んでいたが、宋代に「住持」という呼称が禅宗で使用され、それが後に一般的となり、職も付与して「住持職」と呼ぶようになった、「住職」には、各宗派毎に資格規定が設けられていて、僧侶であるならば誰でも住職になれるとは限らず、女性住職を認めない宗派や、逆に住職資格がない僧しか居住していない寺院があり、僧侶はいるのに無住（住職の無い）とされる場合もある、一般的には、学校を卒業後、修行道場で一定の期間研鑽に励んで宗派の事務統括所に登録すると住職資格を得る事が出来るということのようだ、単純ではない事を知った。

「平家物語」の冒頭、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす…」の沙羅双樹の花の色は、（釈尊入滅の時に色を変えた）沙羅双樹の花の色ということだったのだ、己の浅学を知るに十分だった、恥ずかしい。

「涅槃図」の事を調べたついでに、もう少し仏教関連の事を調べて見た、仏とは、死んだ人のことでは無く、仏の悟りを開かれた方との事、悟りといっても、低いものから高いものまで、 全部で52の悟りがあってこれを「悟りの52位」というそうです、悟りの位は、一段違えば人間と虫けらほど境涯が違うと言われるようです、悟り一段で、それくらい境涯が違うようですが、その悟りの位の、下から数えて52段目の大宇宙最高の悟りを仏の悟りと言うようです。

その仏の悟りを開かれて、大宇宙の真理をすべて体得された方を仏とか、仏さまと言うようで、その大宇宙の真理を「真如」とも言いますから、真如を体得し、「真如より来現した人」ということで、「如来」とも言われます、ですから、「如来」と「仏」とはまったく同じ意味のようです、地球上で仏の悟りを開かれた方は、お釈迦さまただ一人ですから、「釈迦の前に仏なし、釈迦の後に仏なし」と言われるようです。

じゃあ他の仏とか如来というと、大日如来とか、薬師如来とか、ビルシャナ如来とか、釈迦如来以外にもたくさん説かれています、地球上にはお釈迦さまただ一人ですが、大宇宙には地球のようなものが数え切れないほどありますので、仏の悟りを開かれた方もガンジス河の砂の数ほどいるとお釈迦さまが説かれています。

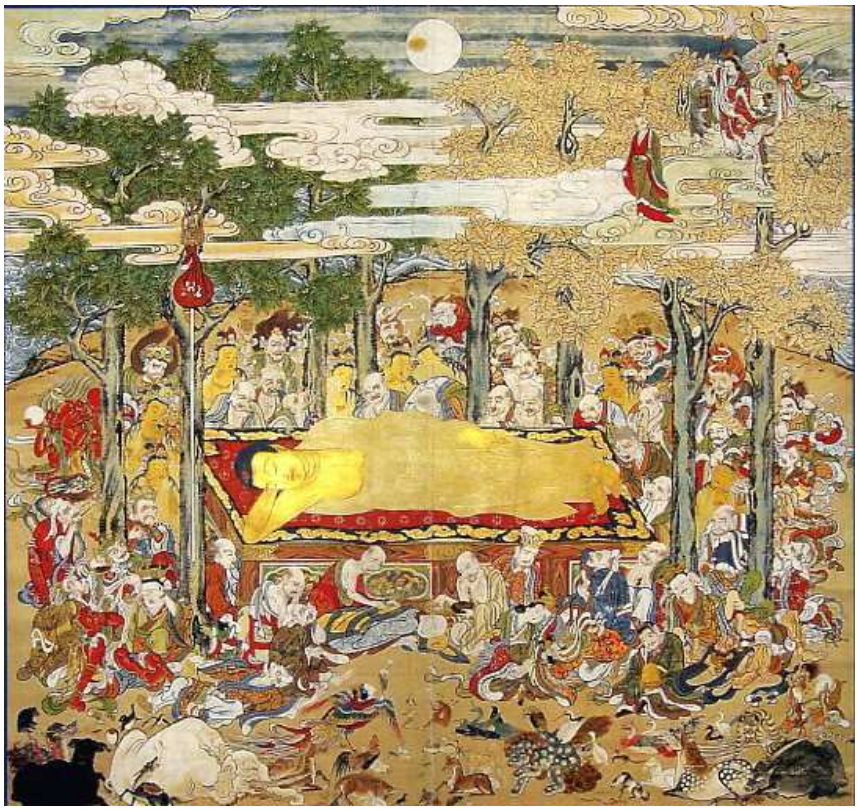
そのたくさんの仏さまの中で、諸仏の王と説かれているのが、「阿弥陀如来」です、「般舟経」には、全ての仏は、阿弥陀如来のお力によって仏の悟りを開かれたと説かれていますから、大宇宙の諸仏の先生でもあります、また「楞伽経」には、全ての仏は、阿弥陀如来の浄土から出てこられたとも説かれているようで、お釈迦さまも、大日如来も薬師如来も、ビルシャナ如来も、阿弥陀如来の弟子なのです、実際、全国の寺院の半分以上は、阿弥陀如来を本尊としているとのこと。

観音菩薩とか勢至菩薩、弥勒菩薩とか地蔵菩薩、文殊菩薩とか普賢菩薩など、菩薩といわれる人達がありますが、「菩薩」とは何かというと、「菩提薩埵（ぼだいさった）」の略で、「菩提」とは仏の悟りのことで、「薩埵」とは、求める人、ということですから、まだ仏の悟りを得ておらず、仏の悟りに向かって努力している人を「菩薩」と言います、仏の悟りを求める人と言っても、ピンからキリまであり、悟りには52の位がありますから、そのゼロ段から51段まで色々です、観音菩薩とか勢至菩薩、弥勒菩薩のような、非常に高い悟りを開いている菩薩もいれば、悟りの位はゼロ段でも、真実の幸福を求めている人は菩薩ですとのこと。

仏教で、菩薩の下に説かれているのが、神ということで、仏教にも「神」という考えがあり、一寸びっくりしました、では仏教の神とは何かといいますと、 梵天や帝釈天、 多聞天、持国天、増長天、広目天の四天王などありますが、そのつとめは、仏法を勧め、仏法を求める人を守ることだそうです、話は前後しますが、諸仏の王は「阿弥陀如来」、仏（如来）は「釈迦如来（お釈迦様）」、「大日如来」、「薬師如来」、「ビルシャナ如来」等、菩薩は「観音菩薩」、「勢至菩薩」、「弥勒菩薩」、「地蔵菩薩」、「文殊菩薩」、「普賢菩薩」等です。

これで、仏教に嵌まったかと言えば全く関係無い、神様、仏様を大事にする気持ちを持てない、罰当たりは当然の報いか？　人生残り僅か、神様、仏様大目に見て下さい hi

涅槃図（一例）



中央に描かれているのが「釈迦」（北枕で、身体の右側を下にしている）。
右上に描かれているのが、釈迦の生母「摩耶夫人」（まやふじん）一行、先導するのは、釈迦の十大弟子の一人「阿那律尊者」（あなりつそんじゃ）。
釈迦の真下に描かれている、悲しみのあまり卒倒している人物が十大弟子の一人「阿難陀尊者」（あなんだそんじゃ）です、阿難陀尊者をいかに美男子に描くかが、絵師の腕の見せ所だそうです（弟子の中で一番のイケメン）。
釈迦の枕元の木の上の方に描かれている赤い袋が、摩耶夫人が釈迦のために投じた、薬の入った袋です、右の木は枯れているが、左の木は薬で青々と生き返っている。
註：涅槃とは、全ての煩悩の火が消滅した、安らぎの境地のことをさし、人間が持っている本能から起こる、心の迷いがなくなった状態のことをいうようで、仏教の理想である仏の悟りを得た境地で、死を表す言葉のようです。
釈迦の十大弟子：舎利弗（しゃりほつ）、摩訶目犍連（まかもっけんれん）、摩訶迦葉（まかかしょう）、須菩提（しゅぼだい）、富楼那弥多羅尼子（ふるなみたらにし）、摩訶迦旃延（まかかせんねん）、阿那律（あなりつ）、優波離（うぱり）、羅睺羅（らごら）、阿難陀（あなんだ）

悟りの境地ははるか彼方！（まあ三途の川を渡っても無理だろうな）
神様、仏様に大目に見て貰い、いくらも無い残りの人生、罰当たりの罰は無しでお願いだ！虫が良すぎるが…